

第2部

シンポジウム

「スポーツの好循環—カレッジスポーツの位置づけ」

伊調 馨・米満 達弘・松本 隆太郎（ロンドンオリンピック・レスリングメダリスト）

鈴木 寛（元文部科学副大臣／参議院議員）

佐藤 雅幸（専修大学教授／社会体育研究所長）

久木留 毅（専修大学准教授／社会体育研究所員）

久木留 毅 はじめに、レスリング女子 63kg 級金メダリスト伊調馨選手です。24 年ぶりのレスリング男子フリースタイル 66kg 級金メダル、米満達弘選手です。レスリンググレコローマンスタイル12年ぶりの銅メダリスト、60kg 級、松本隆太郎選手です。最初に、専修大学から花束の贈呈をしたいと思います。皆さん拍手をお願いします。

シンポジウム1に引き続き、鈴木寛先生よりよろしくお願いします。ここからは、スポーツの好循環と題しまして、トップアスリートの役割、そしてカレッジスポーツの位置づけについて話をしていきたいと思います。

せっかく元文部科学副大臣の鈴木先生と3名のメダリストに出てきて頂いたので、ここはもっとこうして欲しいといった、現場の生の声、アスリートからの注文を元副大臣・鈴木先生に聞いて欲しいと思います。

まず米満選手から。米満選手は次のリオデジャネイロオリンピックでも金メダルを目指しています。

米満達弘 今回のマルチサポートはすごく充実していて活用させてもらって、今回良い成績が出ました。そこで、今考えているのは、今度のリオデジャネイロオリンピックにおいて、もっと成績を出すためには、更なるマルチサポートの充実が求められると考えます。引き続きよろしくお願いします。

鈴木寛 わかりました。

久木留 毅 ありがとうございます。しっかり受けとめていただいたと思います。続いて、松本隆太郎選手です。大学院で修士号を取得し、現在、博士号を取得のために試験を受けています。松本選手からぜひ質問をお願いします。

松本隆太郎 今、僕たちの地元でもジュニアの強化育成が始まっていて、僕も最初の頃からお世話になっていました。僕の例で言えば、8年くらいかけて今回のオリンピックでメダルを獲ることができました。ジュニア世代と主力の方が、強化と一緒にやってきていて、小学生も一緒に練習風景を見る、ふれられる機会があり、大学、高校でも一緒に練習することができました。もっと下の世代と一緒の合宿などが増えると、彼らはリオデジャネイロオリンピックや東京オリンピックにおいて活躍する世代なので、先を見越してそういう活動が必要かと思いますので、ぜひお願いします。

鈴木寛 はい。僕もジュニアは大事だと思います。選手と同じ空気を吸うだけでも違いますよね。一緒に練習するのは素晴らしい事だと思います。

久木留 毅 鈴木先生、堺ブレイザーズの件もありますよね。

鈴木寛 大阪府堺市に、バレーボールの名

門チームである新日鉄があります。その新日鉄が堺ブレイザーズというチームになり、ジュニアチームも持っています。そのジュニアチームが堺市にバレー部のない中学生の受け皿になっています。そこにいくと感動するのが、同じ体育館に二つコートがあるんですが、一つでジュニアの選手がやって、その真横でまさに新日鉄の堺ブレイザーズの一流選手が練習をしているのです。このチームは全日本の代表選手なども輩出しているところで、代表選手がスパイク練習をしている横で中学生が練習している。そういう事がどんどんレスリングでもできるようになっていくことが理想です。スポーツ基本計画でもそういう項目を入れてあるので、ぜひやりましょう。

久木留 毅 ありがとうございます。続いて伊調馨選手です。最近、めっきり美しさに磨きがかかっている伊調馨選手から、次のリオデジャネイロオリンピックに向けてのお話をお願いします。

伊調馨 今回のオリンピックではたくさんの応援ありがとうございました。本当に、マルチサポートがあったおかげで3連覇できたと思います。その私からのお願いは、女性ならではのですが、スポーツは男というイメージが強くて、選手として続けるのも女性では限界があり、出産を考える時期もあります。出産してからスポーツ選手としての生活を続けるにしても、やりたいと思ってもそういう道



伊調 馨



米満 達弘



松本 隆太郎

は日本では少ないと感じています。そういう場というか、環境もいくつかあれば、女性のアスリートの進むべき道も増えると思いますので、そういうのをお願いしたいと思っています。

鈴木寛 実を言うと、これからやろうとしていることはそこなんです。本当に今まで男性中心のスポーツ界でした。ただ、先ほど申し上げた久木留メモ、リストではメダル候補を純粋に戦略的に並べていると女子の方が多かったのです。強化費も事実、女子の方が増えました。今まではそれぞれのスポーツ界は男子中心であったので、強化の方も男子の方が多く割いていました。これからは女子の育成のことを踏まえ、セカンドキャリアのことも視野に入れた調査費、研究費を予算として盛り込むことができました。(伊調選手にも)共同研究者になっていただければと思います。それともう一つ、日本のスポーツ政策の中で、とくに早急に対応しなければならないと思っている問題は、女子中学生でスポーツをやらない割合が急速に増えていることです。3割も増えています。その3割増の女子中学生たちが10年後、20年後、お母さんになり、家庭を支えたりする時に、運動を全くやったことがない、運動を好きではない、という親の下では、どうしても子供たちは運動から遠ざかってしまいます。これこそ負の循環になってしまいます。それではいけませんので、どのようにして女子中学生、女子高校生がス

ポーツに慣れ親しんでもらうかが重要な課題です。

久木留毅 ありがとうございます。今日は、私の知っている女性関係者の方々もたくさん来ています。教員、学生もいますのでぜひこの点について、考えてみてください。

佐藤雅幸 シンポジウム1でかなりつつこんだ話が出てきて参りました。スポーツ選手が復興の場に行ってやっているその姿、大変な反響、元気を与えたりもらったりすることになる中、復旧自体にもつながってくるというお話を聞いてなるほどなあと思いました。私は山形県酒田市出身です。母親が、神様の次に偉いのは女性だ、と言います。やはり女性を大切にしない大学、女性を大事にしない国は滅びる、と思います。さて、一部のところで考えると、スポーツの考えられなかった、見えなかった可能性が示唆された、と思います。アスリートの方に質問なんですが、参加された貢献活動についてお話を聞きたいと思っています。

伊調馨 私はロンドンオリンピックが終わってから盛岡に行きました。そこには高齢者の方々もたくさんいましたし、子供たちもたくさんいて、金メダルを見せてお話しして、交流を持たせていただいて、新潟中越地震の時も仮設住宅に行って、たくさんの方とお話する機会がありました。

米満達弘 母校の大学では、復興支援の労働力として被災地に行く人を募集していましたが、残念ながら僕は合宿中で参加できませんでした。ただ、ロンドンオリンピックの時、現地に被災地からスポーツをやっている子供たちが来ていました。レスリングの会場で僕は少しだけ子供たちと話をしました。その中にレスリングをやっている子供がいたのですが、「オリンピック選手に負けないように私も頑張る」と言ってくれました。その言葉を聞いた時、頑張ってよかったとすごく感じました。

久木留毅 ありがとうございます。

松本隆太郎 自分は東北の仙台に行っていました。仮設住宅も訪問しました。ものすごく喜んでもらったのですが、「オリンピックのメダリストが来る」ということで、実際に行って、メダルを見てもらい、触ってもらった時に、おじいさんやおばあさんが、本当に喜んでくれて、涙を流してくれる人までいました。ここまで効果があるものなんだと改めて感じました。メダルを獲って活力になってくれるならば、我々のできることは、これ以外にないと思いました。

久木留毅 鈴木先生どうですか。話を聞いてみて。

鈴木寛 先ほども申し上げましたが、スポーツには本当に不思議な力があります。涙には



佐藤 雅幸

本当に力があります。凄いと思いました。

久木留毅 今回のロンドンオリンピックは、これまでのオリンピックでの心の持ち方と違いがありましたか。

伊調馨 そうですね。ロンドンオリンピックは東日本大震災からの1年半後だったので、地震が起きた時は自分も練習できない状況で、このまま東京にいて練習をしてもいいのか、今すぐ実家に戻って復興支援に行った方がいいのか、すごく迷った時期もありました。でも、たくさんの人たちからメールをいただきました。地元の友達からもです。その言葉は「オリンピックで頑張って」「メダルを獲って」「体調を崩さないように練習がんばって」など、私のレスリングに対する応援メッセージが多かったので、私にできることはレスリング、競技なんだと思わせてくれました。だから、ロンドンオリンピックにかける思いは、アテネ、北京とは違いました。

久木留毅 ありがとうございます。先ほど「つなみてんでんこ」の話もありましたが、「スポー

ツをやっているのだから」という気持ちがよく伝わりました。次に、スポーツを通して、復興の過程により添っている出来事がありますか。

米満達弘 自分たちは結果しか求められていないので、結果を出すことをまず考えました。自分たちが結果を出すことで、日本全体がいい方向、プラス方向になると思っています。できることは少ないですが、自分が頑張ることだけを頑張ればいいのかと思います。

松本隆太郎 スポーツ選手ができる社会貢献は、スポーツを通してでしかできないなと思っています。僕たちが被災地に行って一緒に復興活動するのもそうですが、スポーツを通すとより効果的なことができるのではと感じています。それが僕らにとっての社会貢献ではないかなと思います。レスリング、オリンピックで頑張って、いろんな人に夢を与えることが、僕らが一番やらないといけないことでしょうか。それによって、色々な人々に「感動した」とか「自分も頑張ろう」という気になった、という言葉をいただいて、そっちの方でやってきてよかったなと思いました。

久木留毅 ありがとうございました。

伊調馨 私と一緒に。スポーツ選手にできることはやっぱり、自分たちの競技を一所懸命やること。たくさんの人たちに、感動を与えられると思って、練習を一所懸命やることだけです。

久木留毅 三人とも、日本体育大学（米満選手）、拓殖大学（松本選手）、至学館大学（伊調選手）と行かれ、大学生活を経験されています。カレッジスポーツの位置づけについてのお話をいただきます。鈴木先生が最初に基調講演でスポーツ基本法ができた背景で振興法から名前が変わった。この中で最も重要な点は、「ディベロップメント・スルー・スポーツ」という考え方だと思います。スポーツを通して、社会の開発に貢献していく。大学に関係する我々が、スポーツを通して大学に何を提供していくのか。大きなテーマだと思います。そこで、この機会に大学側から大きな発信をしていきたいと思っています。いろんなかたちで社会への支援ができればと思いますが、まず鈴木先生に、カレッジスポーツに

期待するものについてお話をいただきたいと思います。

鈴木寛 すごく具体的なんですが、専修大学生田キャンパスを中心に、総合型スポーツクラブを作っていただきたいですね。例を申し上げますと、早稲田大学は所沢キャンパスを中心に、NPO 法人早稲田スポーツというのを作っています。私はサッカーなのでずっと全国高校サッカー選手権を見てきていますが、去年くらいから中学校での所属が NPO 法人早稲田スポーツ出身の人が全国大会で1人じゃなくて10人くらいのレベルになっています。これってすごいなと思っていて、実業団だけの部活だけではなく、実業団だけで日本のスポーツ、とくにセカンドキャリアの安心というのはなくなってきている。そういう意味で、大学と地域が、地域といっても多摩川から百合ヶ丘くらいまでのイメージでいいんですが、その辺りの老若男女が、生田キャンパスに集まってきて、しかもいろんなスポーツに親しめるような環境が理想です。

関東の西側には所沢（早稲田）があって、関東の西南側、とくに小田急線沿線には専修大学がある。専修大学のサッカー場や体育館等のファシリティを利用してスポーツに親しんでもらえます。さらにファシリティも大事ですが、人材も大事になります。専修大学には優れた人材がいっぱい、その中には優れたスポーツ指導者もたくさんおられると思います。そして、おそらくここにいらっしゃる学生は、必ずしもアスリートとしてではなく、僕みたいな裏方になっていく人もいます。僕も高校時代にサッカー部のマネージャーになって以来、Jリーグをつくったりワールドカップを誘致したり、2002年の時は組織委員会の委員をやったり、今は東京オリンピック・パラリンピック招致議員連盟事務局長をやっていますが、ある意味ずっと裏方人生です。英語ではフロントワークといいますが(笑)。スポーツのフロントワークは地味ですが、充実しています。多くの人がスポーツクラブのマネージメントのサポートに回るので、大学時代に専修大学の運営するスポーツクラブのようなものの運営に携わるとなれば、これは最高のインターシップです。そこで一所懸命やり遂げた人間は、就職活動も抜群にほしいと思われるし、なぜならば結局、企業もある種のテーマコミュニティをつくるということなんです。スポーツという地域でありテ-

マであり、リーズナブルなコミュニティをつくること、そこでいろんな経験をしてきた人材は、企業によってテーマは変わってくるけど結局は愛好者サポーター、そしてもっとも素晴らしいものを作る人といった好循環をつくることと共通する。そのプロデューサー、ディレクターという人材を専修大学は建学以来つくりあげてきたんです。商学部もそうだし、法学部もそうだし。そういう新しい社会づくりの人材を輩出する専修大学として、こういうクラブ経営にも乗り出していただくことで、教育的な面にもよろしい。その方が、地域と大学、スポーツ界と大学という関わりが広がる。カレッジスポーツの定義をもっと広くしてほしい。「カレッジスポーツ2.0は専修大学から生まれる」としてほしい。

久木留毅 ありがとうございます。今、鈴木先生が裏方の話をしてくれたのですが、ここに来てくださったメダリストの3人はいろんな意味でフロントラインですね。それぞれの出身大学は至学館大学、日本体育大学、拓殖大学ですが、もし、コーチの要請がありましたらレスリングを教えたいと思いますか？

伊調馨 思います。

久木留毅 リオデジャネイロオリンピックが終わって引退するとしたら、自分の大学で教えてみたいな、あるいはアマチュアレスリングを専修大学で教えてみたいと思いますか。

伊調馨 思います。今まで教わってきた技術は世界一だと思っているし、その技術を後輩たちに伝えるのも自分の責任、義務だと思いますのでそういう機会があれば教えていきたいと思います。

松本隆太郎 トップ選手としてスポーツに取り組んでいる人は大学を卒業すれば企業などを練習拠点として取り組むことになると思います。私の場合は大学に残って企業にサポートしていただきながら大学生と一緒に練習をしている状況です。ですから普段から大学生と一緒に練習をして、そこで指導もしています。現在、そういう立場にいますので、普通の競技が終わったら、大学で教えたいという思いも強いですが、やはり大学に残るといいうことは、採用の枠、定員といった問題もありますので、実際には残って指導をすると

いうのは難しいのかもしれませんが。そのような現状の中で、幼少年の指導やスポーツクラブでの指導ということが実現できれば、就職先が広がりますし、そういう面が充実してくれると、トップアスリートのセカンドキャリアももっと充実すると思います。

米満達弘 私は選手を引退しても自衛官なので、どうなるかわかりません。ただ、仕事の休みの日なら、顔を出して子供たちに自分が学んできたことを教えたいという気持ちはあります。専修大学にも伺いたいです。

久木留毅 ありがとうございます。トップアスリートがコミュニティの人に対していろいろな指導者や経験を話していく。スポーツにおける好循環の話だと思います。次に場としての話をしたいと思います。トレーニングの場もありますし、気分転換の場、交流の場、いろんな場がありますが、3人にとって大学とは、どういう場だったのでしょうか？

伊調馨 私は大学においてレスリングが中心でしたが、生涯という観点から一生涯の友達を見つけれられたなと思います。レスリング部の仲間、他のクラブの仲間、今も友達ですし、一番苦しい時、辛い時に相談できる相手だと思っています。大人になってから友達になったという点では、大学というところは大きかったと思います。

松本隆太郎 合宿所でよく同じ仲間と顔をあわせるのですが、今でも強いつながりがあるし、オリンピックで明確にメダルを獲ろうという強い気持ちを持ったのは大学からです。全日本の合宿もありましたが、日頃の練習で、夢の過程を追ってきたのも大学だったし、そういう点からも、本当に自分の中で一生切り離せない場所だと思います。

米満達弘 大学って、基本は勉強するところじゃないですか。でも、自分が大学に入学した理由もプライオリティはレスリングしか考えていませんでした。勉強は単位さえ取ればいいと思っていました。ですから卒業をするためには、昼寝はまづい、といった程度でした。レスリングのことしか考えていませんでした。私の周りには、大学が勉強するところだという人たちがたくさんいました。現在、ロンドンオリンピックに出場し、金メダルを獲得でき

て思うのは、大学4年間、レスリングにかけてよかったなということです。

久木留毅 鈴木先生も大矢根先生も、スポーツと大学の共通性ですとか、示唆してくれたことですから色々あると思います。ここにいるトップアスリートの皆さんは、レスリングを通してものすごい勉強をしていたのかもしれないですね。鈴木先生が推奨されているコミュニティスクールについて、少しお話を聞かせて頂けますか。

鈴木寛 コミュニティスクールとはですね、私が慶應義塾大学准教授のときに金子先生と発案をしたものです。公立の小学校・中学校でありながら、それぞれの学校に理事会・協議会を設置して、その理事会、協議会に、学校の校長先生だけではなく地域の住民・ボランティアの代表、保護者、PTA会長などが理事とか理事長になるんですね。学校づくりと地域や保護者、学生ボランティアが、自分たちの地域の学校は地域でつくって地域の子は地域で育てるということ。これまでの公立の小学校は官立の小学校といっていますが、文部科学省や都道府県教育委員会が決めたことを実践する場所だったんですね。そうじゃなくてコミュニティスクールはみんなで作る、みんなで考える学校ということです。それをやろうと思うと、ものすごく知恵もいります。言われたことだけやるのではなくて、それぞれの子供たちをつぶさに観察しないといけないし、もっともっと深く関わらなくてはいけない。いろんな意味でも人材がいる。学校のボランティア、老若男女、学生からお年寄りまでのボランティア、いろんな人たちが、教員とボランティアが完全にコラボレーションしてつくっていくのですが、これがおかげさまで、今全国で1183校できています。そこまできなくても、学校支援地域報告としてコミュニティスクールにおいては、最終責任と経営責任も一緒に負います。理事長は60歳から70歳の方がやってくれているみたいです。経営責任は校長が取るけど、地域ボランティアは100名くらい、コミュニティスクールだと200名くらいいる。そこまできな学校は3000校くらい。それから土曜日と放課後だけ学校側中心で運営している学校が10000校あります。実は支部ではものすごく大革命が起こっています。今、そういった学校に関わっている学校ボランティア数が、平



成 23 年度は 647 万人。3、4 年前は数十万人だったのが、もう 20 倍、30 倍という数になっています。

ただ、この場合どうしても放課後ちょっと遊ぶとか、授業のサポートだとか、図書館の整理だとかになります。そうするとボランティアをやってくれる方が偏る。ここにスポーツを入れていきたい。例えば放課後の部活動。スポーツだったらもっと 600 万どころじゃなくて、全国でスポーツを愛好している方は数千万人いるわけで、そういう人たちがもっと関わってくださると、もっとよくなると思います。

コミュニティスクールのいいところってどういうことかという、日本の子どもたちって、知っている大人ってお母さんと担任の先生くらいなんです。とくに都会の子はお父さんが夜帰ってこない。昔は僕らの頃は、親戚のおじさんおばさん、母方父方 20 人位いたけど、今は少子化で親戚がいない。そういう意味で、血の繋がっていないおじさんおばさん、血の繋がっているおじさんおばさん、そういう流れになってきますが、そういう色んな人間関係ができることが、子供の学びや育ちや、あるいは悩みや憧れる存在に出会うので大事なんです。その時にスポーツに取り組んでおられる人が入って来ると、子どもにとっては一所懸命頑張っているアスリート、素晴らしいロールモデル、あこがれ、と近く出会える、縁ができるということが、年に1回でも2回でも触

れあえると違う。そういうのを増やしていきたいです。

久木留毅 ありがとうございます。今、教育の場でもいろいろなかたちでものすごい地殻変動が起こっています。そこに、3人のトップアスリートは色々なかたちで関わっていける可能性を持っているんですね。次の課題としては、セカンドキャリアとしての大学もあると思います。引退後にどの様に大学と関わっていくか。今、鈴木先生もいろんな話をされたと思いますが、今日の話を含めて、引退後のキャリア、伊調選手、米満選手はリオデジャネイロオリンピックでもやと思います。セカンドキャリアを決める時期っていうのは必ずやってくるんですね。その中で、大学とセカンドキャリアということに対して、どう考えているのか、お聞かせ下さい。これはピンポイントで松本選手に聞きます。

松本隆太郎 今、全日本のトップチームはナショナルチームです。僕らの時は専修大学の佐藤満強化委員長がトップでやられていました。その専修大学の佐藤強化委員長は、朝練習を見て、すぐ授業に戻って、その後マットの練習に参加し、また戻っていくというすごくハードな姿をずっとみてきました。兼任ではなく、全日本のトップチームの指導者としての職があった方がいいと思います。現在、専任コーチというポジションもありますが、専

任コーチは任期が1年です。その専任コーチをやった後にキャリアがどうなるのか、不安もあります。その辺りを少し、聞いてみたいと思ったんですが。

久木留毅 持論で結構ですので、鈴木先生。

鈴木寛 いや、答えにくいっていうかね。例えば、私がずっと関わってきたサッカーはそうなっています。岡田監督が専任で、基本的には4年間。ワールドカップからワールドカップまで4年間任せる。というのが、あるスポーツではできているわけで、レスリングは日本の中でもすごくシステムがしっかりしているスポーツの一つですが、そのレスリングにしても兼任せざるをえない。そのためのお金を含めてリソースをどう集めていくか、ここはまさに、スポーツプロデューサーですよ。専修大学の皆さんから何のために商学や経済や法学を勉強しているのか。こういうレスリング協会の監督がフルタイムで4年間打ち込めるようなソーシャルビジネスモデルを考えたり、実現をしたりする人が育ってほしい。それは机上の空論で考えていてもだめです。サッカーって、1990 年くらいは同じだったんです。20 年間は、僕らのようなみんな有志でした。通産省サッカー部有志、大蔵省サッカー部有志、そして博報堂サッカー部有志。そういう有志が集まって、どうしたら日本のサッカーがよくなるのか。サッカーは当時アマチュアだったのでどうしたらプロになれるのか、もっとというと僕は 1987 年にワールドカップを呼ぼう、と言っていて、ワールドカップを呼ぶためにはJリーグをつくらないといけない。その時は、国立競技場で1部リーグの決勝の試合で、1万人入るか入らないかくらいだった。だから、申し上げたいことは、レスリングは7合目くらいまで来ていると思いますが、10 年、15 年、25 年、チームが頑張り続けると、ソーシャルビジネスを含め、サポートする人たちが増え、サッカーくらいにはなるのではないかなと思う。僕はサッカーを単なる成功例に終わらせずになりたいと思う。ロンドンオリンピックで実施したマルチサポート事業では、スポーツ医学、スポーツ科学、スポーツ情報学、スポーツ栄養学のサポートについても同様に、突き進めていきたいと思っています。

スポーツソーシャルビジネスは、単に儲けが目的ではありません。しかし、損をし続けることは長続きしないので、いろんな人の持ち

出しだとあれだし、この世界にもっと優秀な人材が数多く入ってくれないといけない。それは選手もそうだしコーチもそうだし、それを支える存在もそう。そういう人たちが入ってくる競技・種目ですね。それも、一つの競技・種目では無理ですね。レスリングと柔道と、二つ三つと集まれば、できるのではないのでしょうか。それがソーシャルイノベーションです。そこを考えてくれる専修大学であってほしいなと思います。

久木留毅 ありがとうございます。今日は学部長もいらっしゃるの、ぜひその辺りについて考えてもらえればと思います。松本選手は、現役選手ながら修士課程を修了して、今、ある大学の医学部を受験しております。将来は博士号を取得したいと考えています。レスリングでは、佐藤強化委員長が金メダリストでありながら博士号を取得しています。男子のナショナルチームのコーチは11人中5人が修士号を取得し、内2人が博士号を取得しています。これは一つのモデルになると思います。

鈴木寛 素晴らしいです。

久木留毅 松本選手がメダルを獲って、今度は博士号を取ったとすれば、それは国としても有益なことです。

鈴木寛 ものすごく可能性があると思います。スポーツ医学が持つ可能性もそうだし、スポーツの器具、スピードスケートだったらスケートシューズとか。そういう工学の面から貢献できることもあるでしょう。それから、実は経営や商学とかでも博士号が取れてしまうのです。先週の日曜日に、13の大学の大学3年生が集まって、スポーツ政策とスポーツビジネスのゼミ対抗アイデアコンテストみたいのがあって、それにきました。スポーツはビジネスとしてみて、ものすごい存在なんです。今や、テレビとか新しいメディアはスポーツなくして成立しない。スポーツってキーワードでメディアもできるし医学もできるし教養も。例えば、ここにいらっしゃる方々はレスリングのプロではないのに、セルフマネジメントがすごい。これだけ厳しい減量とものすごい克己心、自分をコントロールする力を体感されてきている。その時になぜ修士号や博士号を取ることが大事なのかというと、今は暗黙知になって

いますが、修士・博士を目指して研究することで、彼らの体験が表に出てきます。論文に自分の体験を書くことで、次のジェネレーションや他の種目に応用できるようになると思います。そういう意味で、いち早く始められたので、いかに言語化して、色々な人に伝えられることが意義ある行動になると思います。

久木留毅 今、先生から大変貴重なお話が出ました。暗黙知を形式知にする。このシンポジウムは色々な情報を発信することが目的です。鈴木先生、大矢根先生をはじめ、3人のトップアスリートに来ていただいたのもそのためです。暗黙知を学生や教職員に提供したいというのが社会体育研究所の意図するところです。

そこで、ちょっと離れてしましますが、究極の暗黙知の話になります。私がオリンピックを間近で見ていて、伊調馨選手はロンドンオリンピックの期間中に、実は大きな怪我をしました。なぜそれを乗り越えて、次の試合、本番を迎えることができたのか。また、その本番に行く時に何を考えていたのでしょうか。それは、社会で窮地に追い込まれた時に「伊調選手はこうだったんだ」というヒントにもなると思います。究極に追い込まれた状況で、なぜあきらめなかったのか。挑戦できたのかを教えてください。

伊調馨 難しいですね。怪我をしたことは仕方のないことなので、開き直ることができたのでしょうか。

久木留毅 仕方がないと思った？

伊調馨 はい。

久木留毅 怪我をしたにもかかわらず練習をしたいと言いましたよね。でも、コーチにとめられました。2日目、我慢できずに練習に行きました。なんで行ったんですか。

伊調馨 行きたかったからです。

久木留毅 試合があったからですか。

伊調馨 そうですね。はい。

久木留毅 怪我を前向きに捉えたのですか。

伊調馨 怪我した時に最初は歩いて帰ったのですが、途中で痛くて歩けませんでした。そこで、途中からおんぶされて帰ってきたのですが、その時はだめかもしれないと本当に思いました。それで、マルチサポートハウスで電気や超音波で治療しました。アイシングもしていただき、それを夜中ずっと三日三晩くらいやりました。その甲斐あって思った以上に痛みが早くとれました。それは医療のすご



さというか、アイシングの効果を改めて感じました。それで少しでも練習ができるなら練習場に行きたいと思いました。結果的に金メダルは獲れたのでよかったです。

久木留毅 改めて鈴木先生のマルチサポートハウスの支援のおかげですね。

伊調馨 マルチサポートハウスには自分の友達、両親を気軽に呼ぶことができました。そのような環境を整えていただいたので、気持ちの面で助けられました。

久木留毅 伊調選手のレスリングスタイルは、佐藤強化委員長から言わせればオリンピックで一番いい試合をしたという話でした。松本選手、金メダル目指して死ぬほど練習してきました。間近に見ていましたから、それを感じていました。金メダルが掛かった大一番、準決勝のイラン戦、ラスト1秒早ければ1セット目取っていたかもしれない。あの時、どう思いましたか。

松本隆太郎 そこに関しては特に考えなかったのですが、北京に出られなくて悔しい思いをしてやってきた。その中で、ここに来ているメンバーで今回のオリンピックで負けたのは僕だけです。この気持ちは、経験した人にしか分からないと思いますが、金メダルの前に準決勝で負けた時点で、夢はそこで終わってしまって、自分の中でもういいやという気持ちにもなったのですが、そこは、応援してくれる人たちのために頑張りますとかよく言うと思うんですけど、あれは、結局、結果論で、「あの人のために」と試合中に思いながらやる人はいないと思います。試合中は自分のために、自分が頑張ってきたのだから、その結果、出した結果がいろんな人の支えとか希望を与えたりとかあるんですが、僕が負けた時には自分の夢が終わったと思いました。そこから、次の試合までに3時間くらいありました。そういった中で、いろんな方からメールをいただいたり、ネット環境も整っていたのでフェイスブックだったり、ネットだったり、地元の雰囲気だとかそういうのを見られて、自分の夢は終わったけど、あと1試合は、僕を送り出してくれた人、応援してくれた人のためだけに頑張ろう、とそこで気持ちを入れ換えることができました。

久木留毅 ありがとうございます。米満選手には質問が二つあります。一つは、2011年の世界選手権、決勝まで行って負けてしまったじゃないですか。だれもが金メダルと思っていた。そこから、どうやってオリンピックに向かったのか、というのが1点。

米満達弘 2011年の世界選手権決勝で負けたのは自分の中で想定内でした。3位以内に入れば、日本のオリンピック出場枠がもらえました。自分の世界選手権の目的は日本の出場権を獲ることでした。出場権を獲るには2位か1位かでしたが、あまり優勝は意識していませんでした。2012年のオリンピックの金メダルが目的だったので、自分で目標を決めて、その目標が達成できればいいのかなと。周りがとやかくいっても、今年の自分の目標ができればいいと思います。小さくても大きくても、自分で目標をつくることです。レスリングを始めた時の目標は、とにかく自分がひ弱だったので、少しでも体を強くするためでした。身体が強くなるという小さい目標からはじまったので、自分が決めた目標をクリアしていけば、スポーツは強制的なものではないと思うので、自分の目標が達成できればいいと思います。

久木留毅 もう一つ質問です。今回、米満選手はロンドンオリンピックでものすごいリーグに入ったんですね。レスリングというのはシードがありません。なので、2011年世界2位でも、世界チャンピオンといきなり当たることがあります。2009年に3位、2011年に2位、それと同じく、2009年の1位から3位までがいるリーグになってしまった。あの時に、周りの人が駄目だとは思っていないけど「これはなんてくじを引いたんだろう」と佐藤強化委員長が思ったそうです。米満選手はどうでしたか。

米満達弘 それは想定内でした。想定外は自分にとってのリスクなので、2010年の世界選手権のトーナメントの組み合わせが、今回のロンドンオリンピックのようにものすごくくじ運が悪かったことがありました。2010年の世界選手権はそのリスクが考えられず、想定外のことでした。想定外と思ってしまい、成績もよくありませんでした。だから2012年のロンドンオリンピックは、どんな選手と当たったとしても想定内にしようと思っていました。ど

んな組み合わせでも対応していく。2年間でそれを練習してきました。ですから、くじ運が悪くても、そこまで驚くことはなかったです。周りはすごく驚いていました。強化委員長ものすごく驚いていました。会長も自分になぐさめみたいな言葉をかけてくれて、「開き直っていこう」「ベスト尽くせば大丈夫だから」と言われましたが、自分は想定内でした。ただ、想定内にするには経験が必要だと思います。もし経験がなければ想定もできません。2010年の経験がなければ、2012年の組み合わせを見たときに慌ててしまったと思います。経験を積むことは大切です。悪い経験もいい経験も積むことが大事だと思います。

久木留毅 ありがとうございます。この経験を、コミュニティスクールに入れたり、カレッジスポーツに取り入れられたりできれば大きな財産になると思います。

鈴木寛 今日のお話が財産になりました。僕の学生時代はそういう経験はできませんでしたので、これから世界を目指す上で勉強になりました。

久木留毅 ありがとうございます。ここでフロアから質問を伺いたいと思います。

質問者1 地元の老人クラブに入っています。いろいろお話を伺いまして、これからは老人がどんどん増えます。僕も高齢者です。しかも、僕は経済学部OBです。いろいろお話を伺って思ったことは、子どもたちといろいろなスポーツのお話が出たんですが、この3人の選手の方が、これから第2キャリア、第3キャリアで研究者の立場になるかもしれません。そういった時に、高齢者スポーツにも光を当てていただければ、と感じています。例えば、地元ですと老人クラブの連合会、ついこないだ、日曜日にスポーツ大会が300人くらい集まってやったのですが、そのようなものを研究対象にいただくとか、レクリエーション的な、老人クラブ、スポーツ大会などを追いかけてたりなど、光を当てていただきたいと思います。これは質問ではなく要望でございます。

久木留毅 この辺り、鈴木先生に色々なかたちで携わっていただけたと思います。また、アスリートの皆さんも、しっかりと色々なこと



ろで携わっていくと思います

質問者2 私は普段ジャーナリズムを勉強しています。そこで、選手の方3人に質問です。ロンドンオリンピック以前からテレビや雑誌などメディアの取材を受けていると思います。今後メディア、新聞などでこういう報道をしてほしいということがありましたら教えてください。

伊調馨 私はあまりメディア好きではないのですが、新聞に関しては思い出があって、初めて国際大会に出た時に18歳だったんですが、その時に銀メダルだったんですね。その他に吉田沙保里選手と浜口京子選手も参加していて、二人は金メダルを獲ったんです。私だけ銀メダルだったんです。その時に、いろんな雑誌やテレビでは伊調だけ銀、勝てなかったと書かれていたんですが、ある新聞は、私に期待してくれている書き方をしてくれていたんですね。私自身はとても悔しかったです。銀メダルで。銀じゃ意味がないくらいの気持ちで臨んだのですが、その新聞は私のことを、やる気になるような、これからも頑張っていけそうな文章を書いてくださって、その新聞を読んだときには嬉しかった。選手はそういうメディアも見、見ないはありますが、そういったので少し嬉しくなったり悲しくなったりする部分もあるので、そういう意味で、メディア好きではないというのもあるのですが、そういうのを新聞メディアにも期待したいですね。

松本隆太郎 レスリングは女性や米満選手の活躍で大分注目されるようにはなったんですが、やっぱりアマチュアスポーツってオリンピックの年、その前の年くらいしかなか注目されない競技で、他のマイナースポーツといわれる競技もそうだと思うんですが、野球やサッカーはずっと追ってくれるけど、マイナースポーツはオリンピックの一過性で終わってしまっています。合宿もこれからあるんですが、オリンピックの次の年とか、メディアが少なくて注目されないんだなという気持ちが出てくるので、オリンピックの宣伝だけではなく、4年周期で考えるスポーツと思っています。その4年間、しっかり追ってくれと僕らも取材の受け甲斐もあるし、いい結果を出した時に、追ってくれた人たちにありがとうの気持ちを持っていけるとと思います。心に留めていただけるとありがたいです。

米満達弘 自分はテレビとかは全く見ないので、何も感じないです。新聞とかもスポーツ新聞もまったく見ないので、何にも言えないです。自分が頑張ればいいかな、と思います。

質問者3 鈴木先生をお願いしたいのですが、地域活動に多く関われる人たちに、地域通貨のようなかたちで報酬を与えられないかなと思うんです。現在、地域貢献の活動ではボランティア的なかたちで支援をして、金銭的なもので支援をするのも必要じゃないかなと思うんですが、鈴木先生はどう思われるでしょうか。

鈴木寛 実は僕は慶應義塾大学の助教授をしている時に地域通貨の研究をしていました。アドバイスは生田キャンパスで川崎市や多摩区を巻き込んで、地域の人を巻き込んで、OBを巻き込んで、小さくてもいいからやってみるということですね。スポーツということではないですが、埼玉県のある市では、アーツという地域通貨を出して、市民劇場、市立劇場で実践されていました。スポーツの方が地域の賛同者は多いので、地域通貨とか成立する可能性が高いと思います。一般論で申し上げていますが、個別、固有名詞を残して、ぜひ皆さんでやっていただいて……。現に、税制が変わって、そういったような活動に対して個人が寄付をした場合は税額控除、1万円寄付すれば5千円かえってくる制度が去年からできあがっている。そういうのを活用してください。ぜひ頑張ってみてください。専修モデルが広まっていくと思います。私も協力します、共同研究しましょう。

久木留毅 皆さんお疲れ様でした。トップアスリート、皆さんからたくさんのがが学べたと思います。ものの見方、考え方を変えたとさまざまなアイディアが見えてくると思いました。それから、専修大学含め大学というのは好循環のプラットフォームとしての役目を担う可能性があるということをつくづく感じました。それではこの余韻をしっかりと残して、これで終わりたいと思います。シンポジストの皆さん、本当にありがとうございました。